

魔法人形の少年は、そんなお姫様の様子を
愛おしそうに見つめています。

少年の視線に気付いたお姫様は、
少年にごめんなさいと言いました。

少年は不思議そうな顔でお姫様に問いかけます。
なぜそのようなことを、と。

私ばかり味わって、とお姫様は返しました。

少年は魔法人形ですので、
物を食べることができません。

「あなたにも味わわせてあげたい」

お姫様がそう言うと、
少年はにっこりと微笑んで言いました。

「わたくしは、お姫様のその巻情を味わっております」

まっすぐに見つめて言う少年に、
お姫様は顔が赤くなりました。

「暑いわ」

お姫様はこまかすように言いました。

そして、ガラスのお椀を頬に当てました。

お椀はお菓子によって冷たくなっていました。

少年がそんなお姫様にぐっと近づきます。

二人はお椀を挟んで頬を寄せ合っていました。

少年にもガラスのお椀の冷たさがわかりました。

二人のその時間を、
誰も邪魔することはありませんでした。

おしまい

とても幸せそうな顔で、
お姫様は少しずつ少しずつ
お菓子を食べていました。

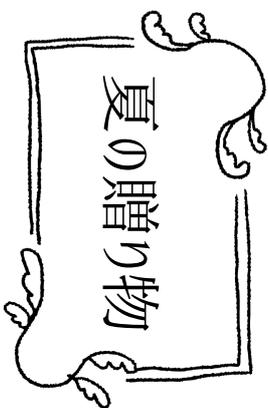
お菓子はお姫様の口の中で溶け、
甘さが広がります。

お姫様は匙で小さくくくくく運びます。

ガラスのお椀に盛られた冷たいお菓子。



お城に森の魔女から贈り物が届きました。
それは不思議に冷たく凍ったお菓子で、
お姫様はこれが大好きでした。



Makes 童話

著・佐藤こおり

暑中お見舞い申し上げます

プリントして頂き
ありがとうございます
こおりと申します

暑い日が続いておりますが
水分と塩分の摂取を
お忘れなきよう
お気を付けてくださいませ

皆様も皆様のセイさんと過ごす
最初で最後の平成の夏を
楽しめますように

発行

2018.07.28

佐藤こおり @031OmH9